

積立定期預金規定

株式会社 北陸銀行

1. (反社会的勢力との取引拒絶)

この預金口座は第 13 条 6 項各号のいずれにも該当しない場合に利用する事ができ、第 13 条 6 項各号の一にでも該当する場合には、当行はこの預金口座の開設をお断りするものとします。

2. (預金の預入れ等)

- (1) 自由型は個人、目標型は法人（個人事業者含む）のお客さまを対象にしております。
- (2) この預金の預入れは、1 回あたり 5 千円以上とします。
- (3) この預金は、口座振替によるほか現金・小切手・その他証券類により当店のほか当行本支店のどこの店舗でも預入れができます。
- (4) 自動預入支払機による預入れについては、1 回あたりの預入れ金額はその預金機に表示された範囲内とし、自動預金支払機が現金を確認したうえで受入れの手続きをします。
- (5) ATM（自動預入支払機、以下同じです）による預入れについては、1 回あたりの預入れ金額はその ATM に表示された範囲内とし、ATM が現金を確認したうえで受入れの手続きをします。

3. (証券類の受入れ)

- (1) 小切手その他の証券類を受入れたときは、その証券類が決済された日を預入日とします。
- (2) 受入れた証券類が不渡りとなったときは預金になりません。不渡りとなった証券類は、通帳の当該受入れの記載を取消したうえで、当店で返却します。

4. (口座振替による預入れ)

- (1) 口座振替による預入れの場合は、あらかじめ当行所定の口座振替依頼書を提出してください。振替日、振替金額、引き落とし方法等は、口座振替依頼書に記載のとおりとします。
- (2) 振替日、振替金額等を変更する場合ならびにこの口座振替を中止する場合には、あらかじめ書面により当店に届けてください。

5. (預金の満期、支払方法等)

(1) 自由型

- A. この預金は預入れのつど預入日の 3 年後の応当日を満期日（満期日とは積立定期預金 1 本ずつの満期日をいいます）とする一口ごとの自由金利型定期預金（M 型）としてお預かりします。
- B. この預金は継続の停止・解約の申出がない限り満期日に元利金合計額および満期日を同一とする預金がある場合はこの元利金を合算した金額をもって同じ自由金利型定期預金（M 型）に自動的に継続します。継続された預金についても以後同様とします。
- C. この預金を解約するときは、当行所定の払戻請求書に届出の印章により記名押印して当店に提出してください。

(2) 目標型

- A. 目標型を開設するときに口座満期日および元利金受取口座を指定いただきます。
 - (a) 口座満期日は、初回預入日の 6 か月後応当日から 5 年後応当日までとします。
 - (b) 元利金受取口座は本人口座に限ります。
- B. 預入期間等に応じて、以下でお預かりいたします。なおおまとめ日は、口座満期日から 1 年ごとにさかのぼった日とします。
 - (a) 預入日から口座満期日までの期間が 2 年以内の場合、口座満期日までを預入期間とする自由金利型定期預金（M 型）としてお預かりします。
 - (b) 預入日から口座満期日までの期間が 2 年超で、かつ次のおまとめ日までが 1 か月未満の場合、次々回のおまとめ日を明細の満期日とする自由金利型定期預金（M 型）としてお預かりします。
 - (c) 預入日から口座満期日までの期間が 2 年超で、かつ次のおまとめ日までが 1 か月以上の場合、次のおまとめ日を明細の満期日とする自由金利型定期預金（M 型）としてお預かりします。
- C. この預金は、口座満期日に元利金の合計額をとりまとめ、あらかじめご指定の元利金受取口座へ自動入金する方法で支払います。

D 口座満期日に、元利金の合計額を指定の元金受取口座に入金した後は、この預金口座の残高はありませんので、この預金通帳は無効となります。

6. (利息)

(1)自由型

A. この預金の利息は、預入日から満期日の前日までの日数および預入日現在における当行所定の金額・期間の階層別定期預金利率によって計算(6 カ月複利の方法によります)し、満期日に元金とともに支払います。

B. この預金を第 13 条第 1 項、同第 5 項または同第 6 項の規定により満期日前に解約する場合、その利息は、それぞれの定期預金について預入日から解約日の前日までの日数に応じた次の利率(小数点第 4 位以下は切捨てます。また、解約日における普通預金利率を下限とします)によって計算し、この預金とともに支払います。

- | | |
|--------------------|----------------|
| ① 6 カ月未満 | 解約日における普通預金の利率 |
| ② 6 カ月以上 1 年未満 | 約定利率×40% |
| ③ 1 年以上 1 年 6 カ月未満 | 約定利率×50% |
| ④ 1 年 6 カ月以上 2 年未満 | 約定利率×60% |
| ⑤ 2 年以上 2 年 6 カ月未満 | 約定利率×70% |
| ⑥ 2 年 6 カ月以上 | 約定利率×90% |

(2)目標型

A. この預金の利息は、預入日から満期日の前日までの日数および預入日現在における当行所定の金額・期間の階層別定期預金利率によって計算し、満期日に元金とともに支払います。

B. 預入期間が2年となる定期預金については、次により取扱います。

①預入日の 1 年後の応答日を「中間利払日」とし、預入日から中間利払日の前日までの日数および当該定期預金利率に 70% を乗じた利率(小数点第 4 位以下は切捨てます)によって計算した中間利払額(以下「中間払利息」といいます)の税引後金額をもって、中間利払日から満期日までを預入期間とする自由金利型定期預金(M型)(以下「中間利息定期預金」といいます)を作成します。中間利息定期預金は、前記 2(1)の規定にかかわらず預入金額が5千円未満でも取扱います。

②中間払利息を差し引いた利息の残額は、満期日に元金とともに支払います。

③中間利息定期預金の利息は、中間利払日から満期日の前日までの日数および中間利払日現在における当行所定の金額・期間の階層別定期預金利率によって計算し、満期日に元金とともに支払います。

C. この預金を第 13 条第 1 項、同第 5 項または同第 6 項の規定により満期日前に解約する場合、その利息は、それぞれの定期預金について預入日から解約日の前日までの日数に応じた次の利率(小数点第 4 位以下は切捨てます。また、解約日における普通預金利率を下限とします)によって計算し、この預金とともに支払います。

- | | |
|----------------|----------------|
| ① 6 カ月未満 | 解約日における普通預金の利率 |
| ② 6 カ月以上 1 年未満 | 約定利率×50% |
| ③ 1 年以上 2 年未満 | 約定利率×70% |

(3) 利率は金融情勢に応じて変化します。この場合、新利率は変更日以後に預入れ、継続、または中間利息定期預金として作成される預金から適用します。

(4) この預金の付利単位は 1 円とし、1 年を 365 日として日割で計算します。

7. (届出事項の変更、通帳の再発行等)

(1) この通帳や印章を失ったとき、または、印章、名称、住所その他届出事項に変更があったときは、直ちに書面によって当店に届出てください。

(2) 前項の印章、名称、住所その他の届出事項の変更前に生じた損害については、当行に過失がある場合を除き、当行は責任を負いません。

(3) 通帳または印章を失った場合のこの預金の元利金の支払いまたは通帳の再発行は、当行所定の手続きをした後に行います。この場合、相当の期間をおき、また、保証人を求めることがあります。

8. (成年後見人等の届け出)

- (1) 家庭裁判所の審判により、補助・保佐・後見が開始された場合には、直ちに成年後見人等の氏名その他必要な事項を書面によってお届けください。預金者の成年後見人等について、家庭裁判所の審判により、補助・保佐・後見が開始された場合も同様にお届けください。
- (2) 家庭裁判所の審判により、任意後見監督人の選任がされた場合には、直ちに任意後見人の氏名その他必要な事項を書面によってお届けください。
- (3)すでに補助・保佐・後見開始の審判を受けている場合、または任意後見監督人の選任がされている場合にも、前2項と同様にお届けください。
- (4) 前3項の届出事項に取消または変更等が生じた場合にも同様にお届けください。
- (5) 前4項の届け出の前に行われた取引の効果は本人に帰属するものとし、それによって生じた損害については、当行は責任を負いません。

9. (印鑑照合)

払戻請求書、諸届その他の書類に使用された印影を届出の印鑑と相応の注意をもって照合し、相違ないものと認めて取扱いしましたうえは、それらの書類につき偽造・変造その他の事故があってもそのために生じた損害については、当行は責任を負いません。

なお、預金者が個人の場合は、盗取された通帳を用いて行われた不正な払戻しの額に相当する金額について、次条により補てんを請求することができます。

10. (盗難通帳による払戻し等)

- (1) 預金者が個人の場合は、盗取された通帳を用いて行われた不正な払戻し（以下、本条において「当該払戻し」といいます）については、次の各号のすべてに該当する場合、預金者は当行に対して当該払戻しの額およびこれにかかる手数料・利息に相当する金額の補てんを請求することができます。
 - ① 通帳の盗難に気づいてからすみやかに、当行への通知が行われていること
 - ② 当行の調査に対し、預金者より十分な説明が行われていること
 - ③ 当行に対し、警察署に被害届を提出していること、その他の盗難にあったことが推測される事実を確認できるものを示していること。
- (2) 前項の請求がなされた場合、当該払戻しが預金者の故意による場合を除き、当行は、当行へ通知が行われた日の30日（ただし、当行に通知することができないやむを得ない事情があることを預金者が証明した場合は、30日にその事情が継続している期間を加えた日数とします）前の日以降になされた払戻しの額およびこれにかかる手数料・利息に相当する金額（以下、「補てん対象額」といいます）を前条本文にかかわらず補てんするものとします。

ただし、当該払戻しが行われたことについて、当行が善意無過失であることおよび預金者に過失（重過失を除きます）があることを当行が証明した場合には、当行は補てん対象額の4分の3に相当する金額を補てんするものとします。
- (3) 前2項の規定は、第1項にかかる当行への通知が、この通帳が盗取された日（通帳が盗取された日が明らかでないときは、盗取された通帳を用いて行われた不正な預金払戻しが最初に行われた日。）から、2年を経過する日後に行われた場合には、適用されないものとします。
- (4) 第2項の規定にかかわらず、次のいずれかに該当することを当行が証明した場合には、当行は補てんしません。
 - ① 当該払戻しが行われたことについて当行が善意かつ無過失であり、かつ、次のいずれかに該当すること
 - A 当該払戻しが預金者の重大な過失により行われたこと
 - B 預金者の配偶者、二親等内の親族、同居の親族その他の同居人、または家事使用人によって行われたこと
 - C 預金者が、被害状況についての当行に対する説明において、重要な事項について偽りの説明をおこなったこと
 - ② 通帳の盗取が、戦争、暴動等による著しい社会秩序の混乱に乗じまたはこれに付随して行われたこと
- (5) 当行が当該預金について預金者に払戻しを行っている場合には、この払戻しを行った額の限度において、第1項にもとづく補てんの請求には応じることができません。また、預金者が当該払戻しを受けた者から損害賠償または不当利得返還を受けた場合も、その受けた限度において同様とします。
- (6) 当行が第2項の規定にもとづき補てんを行った場合に、当該補てんを行った金額の限度において、当該預金にかかる払戻請求

権は消滅します。

- (7) 当行が第2項の規定により補てんを行ったときは、当行は、当該補てんを行った金額の限度において、盗取された通帳により不正な払戻しを受けた者その他の第三者に対して預金者が有する損害賠償請求権または不当利得返還請求権を取得するものとします。

11.（譲渡・質入れ等の禁止）

- (1) この預金、預金契約上の地位その他この取引にかかるいっさいの権利および通帳は、譲渡、質入れその他第三者の権利を設定すること、または第三者に利用させることはできません。
- (2) 当行がやむをえないものと認めて質入れを承諾する場合には、当行所定の書式により行います。

12.（取引の制限等）

- (1) 当行は、預金者の情報及び具体的な取引の内容等を適切に把握するため、提出期限を指定して各種確認や資料の提出を求めることがあります。預金者から正当な理由なく指定した期限までに回答頂けない場合には、入金、払戻し等の本規定に基づく取引の一部を制限する場合があります。
- (2) 日本国籍を保有せず本邦に居住する預金者は、当行の求めに応じ適法な在留資格・在留期間を保持している旨を当行所定の方法により届け出るものとします。当該預金者が当行に届け出た在留期間が超過した場合、払戻し等の預金取引の一部を制限することができるものとします。
- (3) 前2項の各種確認や資料の提出の求めに対する預金者の回答、具体的な取引の内容、預金者の説明内容およびその他の事情を考慮して、当行がマネー・ローンダリング、テロ資金供与、もしくは経済制裁関係法令への抵触のおそれがあると判断した場合には、入金、払戻し等の本規定に基づく取引の一部を制限する場合があります。
- (4) 1年以上利用のない預金口座は、払戻し等の預金取引の一部を制限する場合があります。
- (5) 前4項に定めるいずれの取引の制限についても、預金者からの説明等にもとづき、マネー・ローンダリング、テロ資金供与、または経済制裁関係法令等への抵触のおそれが合理的に解消されたと当行が認める場合、当行は当該取引の制限を解除します。

13.（預金の解約）

- (1) この預金は、当行がやむを得ないものと認める場合を除き、満期日前の解約はできません。
- (2) この預金を元利金受取口座への自動入金以外の方法で払戻しまたは解約（この預金口座の残高の一部に相当する金額の払戻しを含みます）するときは、当行所定の払戻請求書に、届出の印章または署名により、記名捺印または自署のうえ通帳とともに提出してください。
- (3) この預金口座の残高の一部に相当する金額の払戻請求があったときは、解約元金が払戻請求書記載の金額に達するまでこの預金を1口ごとに順次解約することとします（1口の定期預金の一部解約はいたしません）。解約する順序は特に指定のない限り、預入日から解約日までの日数の少ないものからとします。
- (4) この預金の払戻しまたは解約を受けることについて正当な権限を有することを確認するための本人確認書類の提示等の手続をもとめることがあります。この場合、当行が必要と認めるときは、この確認ができるまでは払戻しまたは解約を行いません。
- (5) 次の各号の一にでも該当した場合には、当行はこの預金取引を停止し、または預金者に通知することによりこの預金口座を解約することができるものとします。なお、通知により解約する場合、到達のいかんにかかわらず、当行が解約の通知を届出のあった氏名、住所にあてて発信した時に解約されたものとします。
- ① この預金口座の名義人が存在しないことが明らかになった場合または預金口座の名義人の意思によらずに開設されたことが明らかになった場合
 - ② この預金の預金者が第11条第1項に違反した場合
 - ③ この預金が法令や公序良俗に反する行為に利用され、またはそのおそれがあると認められる場合
 - ④ 法令で定める本人確認等における確認事項、および第12条第1項で定める当行の求めに対する預金者からの各種回答や提出された資料が偽りである場合
 - ⑤ この預金がマネー・ローンダリング、テロ資金供与、経済制裁関連法令等に抵触する取引に利用され、またはそのおそれがあると合理的に認められる場合
 - ⑥ 第12条第1項から第4項に定める取引等の制限に係る事象が1年以上に亘って解消されない場合

- ⑦ 第1号から第5号の疑いがあるにも関わらず、正当な理由なく当行からの確認に応じない場合
- (6) 前項のほか、次の各号の一にでも該当し、預金者との取引を継続することが不適切である場合には、当行はこの預金取引を停止し、または預金者に通知することによりこの預金口座を解約することができるものとします。
- ① 預金者が口座開設申込時にした表明・確約に関して虚偽の申告をしたことが判明した場合
- ② 預金者が、現在、暴力団、暴力団員、暴力団員でなくなった時から5年を経過しない者、暴力団準構成員、暴力団関係企業、総会屋等、社会運動等標ぼうゴロまたは特殊知能暴力集団等、その他これらに準ずる者（以下、これらを「暴力団員等」といいます）に該当し、または、次の各号のいずれかに該当することが判明した場合
- A. 暴力団員等が経営を支配していると認められる関係を有すること
- B. 暴力団員等が経営に実質的に関与していると認められる関係を有すること
- C. 自己、自社もしくは第三者の不正の利益を図る目的または第三者に損害を加える目的をもってするなど、不当に暴力団員等を利用していると認められる関係を有すること
- D. 暴力団員等に対して資金等を提供し、または便宜を供与するなどの関与をしていると認められる関係を有すること
- E. 役員または経営に実質的に関与している者が、暴力団員等と社会的に非難されるべき関係を有すること
- ③ 預金者が、自らまたは第三者を利用して次の各号に該当する行為をした場合
- A. 暴力的な要求行為
- B. 法的な責任を超えた不当な要求行為
- C. 取引に関して、脅迫的な言動をし、または暴力を用いる行為
- D. 風説を流布し、偽計を用いまたは威力を用いて当行の信用を毀損し、または当行の業務を妨害する行為
- E. その他前各号に準ずる行為
- (7) この預金が、当行が別途表示する一定の期間預金者による利用がない場合には、当行はこの預金取引を停止し、または預金者に通知などすることによりこの預金口座を解約することができるものとします。また、法令に基づく場合にも同様にできるものとします。
- (8) 第5項、第6項および第7項により、この預金口座が解約され残高がある場合、またはこの預金取引が停止されその解除を求める場合には、通帳および届出印を持参のうえ、当店に申出てください。この場合、当行は相当の期間をおき、必要な書類等の提出または保証人を求めることがあります。

14.（通知等）

届出のあった氏名、住所にあてて当行が通知または送付書類を発送した場合には、延着しまたは到着しなかったときでも通常到達すべき時に到達したものとみなします。

15.（保険事故発生時における預金者からの相殺）

- (1) この預金は、満期日が未到来であっても、当行に預金保険法の定める保険事故が生じた場合には、当行に対する借入金等の債務と相殺する場合に限り当該相殺額について期限が到来したものととして、相殺することができます。なお、この預金に、預金者の当行に対する債務を担保するため、もしくは第三者の当行に対する債務で預金者が保証人となっているものを担保するために質権等の担保権が設定されている場合にも同様の取扱いとします。
- (2) 前項により相殺する場合には、次の手続きによるものとします。
- ① 相殺通知は書面によるものとし、複数の借入金等の債務がある場合には充當の順序方法を指定のうえ、当行所定の払戻請求書に届出印を押印して通帳とともに直ちに当行に提出してください。ただし、この預金で担保される債務がある場合には、当該債務または当該債務が第三者の当行に対する債務である場合には預金者の保証債務から相殺されるものとします。
- ② 前号の充當の指定のない場合には、当行の指定する順序方法により充當いたします。
- ③ 第1号による指定により、債権保全上支障が生じるおそれがある場合には、当行は遅滞なく異議を述べ、担保・保証の状況等を考慮して、順序方法を指定することができるものとします。
- (3) 第1項により相殺する場合の利息等については、次のとおりとします。
- ① この預金の利息の計算については、その期間を相殺通知が当行に到達した日の前日までとして、利率は約定利率を適用するものとします。

② 借入金等の債務の利息、割引料、遅延損害金等の計算の計算については、その期間を相殺通知が当行に到着した日までとして、利率、料率は当行の定めによるものとします。

また、借入金等を期限前弁済することにより発生する損害金等の取扱いについては当行が負担するものとします。

(4) 第1項により相殺する場合の外国為替相場については当行の計算実行時の相場を適用するものとします。

(5) 第1項により相殺する場合において借入金の期限前弁済等の手続について別の定めがあるときには、その定めによるものとします。ただし、借入金の期限前弁済等について当行の承諾を要する等の制限がある場合においても相殺することができるものとします。

16. (準拠法、裁判管轄)

(1) この預金取引の契約準拠法は日本法とします。

(2) この預金取引について訴訟の必要が生じた場合には、当行本店または取引店の所在地を管轄する裁判所を管轄裁判所とします。

17. (規定の変更)

この預金規定は、法令の変更または監督官庁の指示、その他必要が生じたときに、改定されることがあります。改定を行う旨および改定後の規定の内容並びにその効力発生時期は、効力発生時期が到来するまでに店頭掲示、インターネットまたはその他相当の方法により周知します。

以 上

(2022年11月21日現在)